PICK UP！在宅医療機関　018

医療法人社団 健育会 石川島記念病院
# 下山直人
在宅事業部長

03-3532-3201
ishikawajima.gr.jp
東京都中央区佃 2-5-2

**ビジョン**
緩和ケア、在宅医療は1人ではできないことを認識し、当事業部では、在宅チーム、地域の基幹病院、一般病院、老人・介護施設、地域の薬局、在宅でのご家族との連携の推進を目標としています。

注目の在宅医療機関へのインタビュー取材「PICK UP！在宅医療機関」の第18回目は東京都中央区の「石川島記念病院」にて在宅医療を推進されている下山直人在宅事業部長です。これまでの歩み、これからの在宅医療に向ける思いを熱く語っていただきました。（2025年4月取材）

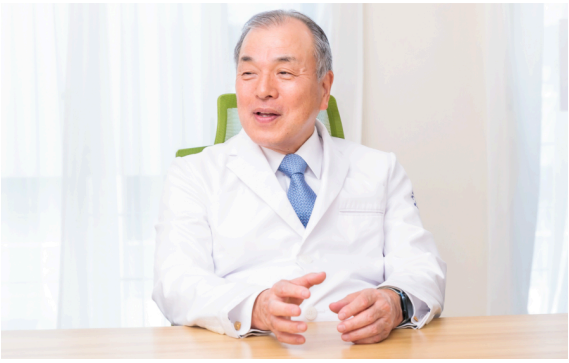
## 「人の役に立ちたい」その想いで医師を志す

**先生が医師を目指されたきっかけを教えてください。**
もともと文学少年で、野口英世の伝記を読んで大変感動して、人のために自分の命を犠牲にする姿に「自分も医師になる！」って決めたんです。小学校5年生になると脳外科医が主人公の海外ドラマ「ベン・ケーシー」に熱中し、「脳外科医になる！」って診療科まで決めてましたね。
私の実家は代々続く農家だったのですが、医師を目指して一直線でした。この時の「人の役に立ちたい」という気持ちは今も大切にしています。

**大学時代で印象に残っている出来事はありますか。**
千葉大学医学部へ進学し、大学時代は勉強よりも部活動に熱心になっていました。卓球を大学からはじめたんですけど、もともと凝り性なのでずっと練習ばかりして。でもそのおかげで、インターハイ出場経験者と一緒にレギュラーに選ばれ、東医体（東日本医科学生総合体育大会）で6連覇することができました。

私らの時代は「医師はまず体を鍛えろ」っていう風潮もあって、その教え通りに過ごしたっていう感じですね。

**大学卒業後に脳神経外科ではなく麻酔科を選ばれたのは、気持ちの変化があったのでしょうか。**
私は脳神経外科か消化器外科に入るつもりでしたが、麻酔科の教授から食事会に誘われまして。ステーキを食べさせてもらったんですが、なぜか教授にはステーキがないんですよ。後から聞くと、どうやら私が教授の分のステーキを食べてしまっていたみたいで…。
麻酔科を選ぶ学生も少なかったので、教授に恩返しできればと麻酔科を選びましたね。気持ちの変化というより、義理と人情で進むことに決めました。



**麻酔科に進まれてからはいかがでしたか。**

就職先の選択肢には国立病院などの公立系の病院や私立病院などがあるのですが、他と比べて忙しいのに給料が低い、バイトもできないなど、国立病院系は人気がなくて、誰も行きたがらないんですよ。そうなると私はお金よりも人助けがしたいから「私がいきますよ」って、卒業後の就職先に国立の千葉大学病院を選びました。

困っている人は患者さんだけじゃなくても、助けたくなっちゃうんですよね。時には、麻酔科医として働いている妻から「私が働いている病院に心臓麻酔に詳しい医師がいない」って相談をうけて、手助けに行ったりしたこともあります。手術前から手術後の麻酔管理を徹底し、死亡率の減少につなげることができたので、患者さんに貢献できて良かったと思っています。

**麻酔科医として経験と実績を積まれている中で、緩和ケアをはじめられたきっかけを教えてください。**

研修医を終えて千葉大学病院に戻ってきた時に、ちょうど教授が変わりましてね。その教授は緩和ケアをしている先生だったんです。
1980年代の話なので、緩和ケアなんて誰もやりたがらないような時代だったから、「じゃあ私がやります」と弟子入りをして緩和ケアをはじめました。

その時に、医師、看護師、メディカルソーシャルワーカー、薬剤師でチームを作って、「緩和ケアチーム」として運営をはじめました。当時の日本では新たな取り組みでしたね。慈恵医大の時はお坊さんともチームを組んで、スピリチュアルペインもはじめたりして。もちろん痛みへの治療や副作用の対応は私たち医師が行いますが、心のケアっていう視点も含めて、包括的に患者さんを支えるという緩和ケアは私が注力してきたものです。

**まさに日本の緩和ケアのパイオニアですね。そこから、緩和ケアに注力されたのでしょうか。**

1990年に千葉大学病院で緩和ケアチームを立ち上げて、1995年から1997年の2年間は緩和ケアを学ぶためにアメリカのメモリアルスローン・ケタリンがんセンターとコーネル大学薬理学教室へ研究員として留学しました。留学といっても様々な留学方法があって、私はお給料はいらないからとにかく勉強させてほしいと希望しましたね。最新の緩和ケアプログラムの指導を受けつつ、研究論文などもたくさん執筆したんですよ。
そうこうして日本に戻ると、国立がん研究センターで緩和ケアチームを立ち上げるから手伝ってほしいということで。国立がん研究センターは、当初は麻酔科医をしつつ緩和ケアを担当していましたが、どんどん緩和ケアの患者さんが増えてきて、最終的には緩和ケア医として働きました。

執筆した学会報告・論文・書籍など

**続きはQRコードからアクセスしご覧ください　→ → →**

おうちde医療
**在宅医療com株式会社**
〒107-0062　東京都港区南青山3-1-36青山丸竹ビル6F
service@zaita9iryou.com